



## 植村 直己監督 プロフィール

高校時代、全日本大学対抗テニス王座決定試合（「大学王座」）で法政大学が優勝した試合を見て「法政大学でテニスがしたい」と昭和50年に法政大学へ入学。卒業後は、朝日生命保険相互会社へ入社、10年間社会人として選手活動を行う。

選手引退後は、社業に専念する傍ら日本リーグのコーチを務め、1992年より法政大学テニス部監督に就任した。

就任当時、テニス部は低迷期にあったが、練習方法の改善、選手の意識改革、トレーナーの指導によるトレーニングの強化など数年をかけて改革を行い、インカレ優勝や大学王座で4度の準優勝など、1部の上位校として定着させた。

現在のテニス部は、  
男子：「王座優勝！」

女子：「1部昇格！」

を目標に取り組んでおり、4月に行われた関東学生テニストーナメント（春関）の男子ダブルスで11年ぶりに見事優勝を果たした。

現在は、夏のインカレや関東リーグに向けて技術の向上、トレーニングによるフィジカル面の強化を図っている。



## 監督歴26年、全てをテニスに懸けてきた！ 今もなお進化し続けるテニスの魅力とは？

昨今、世界で活躍する日本人テニスプレーヤーが増えてきたが、25年以上法政大学のテニス部を見てきた植村監督によれば、世界のテニス技術の進化スピードはとてつもなくはやいそうだ。どんな進歩をしてきたのかお話を伺った。

「監督になった26年前、当時の社会人として考えればかなり長い1週間近い休暇を取って、自費で全米オープンを見に行っただけです。個人的な興味はもちろんですが、指導者として世界のテニスを知らなければいけないと思ったのです。テニスは、他のスポーツに比べ進化スピードがはやいのが特徴的。昔は面が小さい木のラケットを使っていましたが、今は面が大きく、昔と比べ70グラム近く軽くなったラケットを使うようになりました。そのためショットのスピードやパワーが向上し、トレーニング方法や戦術が進化してきました。ラケットの進化により、今の女子中学生選手の打球の速さは、昔の男子のプロ選手と変わらないくらいの人もいます。」

## 夏はテニス盛り上がる！ 会場での熱気を体感しよう

夏の大学スポーツの中でも、気軽に楽しめるのがテニス。経験者も多く、現在世界におけるテニスの競技人口は1億人以上といわれており、日本人でも老若男女問わず、多くの方が楽しまれています。

春から夏にかけては、「関東学生テニストーナメント(春関)」「全日本学生テニス選手権大会(インカレ)」「関東大学リーグ」など大きな大会が開催され、熱い戦いが繰り広げられています。

現在、男子は1部4位、女子は2部昇格という戦績ですが、それぞれ今年こそは！と強い思いをこめて試合に挑んでいます。テニス未経験者の方でも、気軽に応援に来て楽しんでもらいたいという植村監督に、大学テニスの魅力をお伺いしました。

「学生は、とにかく必死に戦うんです。大学の名誉をかけて戦っているのもいるので、特に法政出身者の方に応援に来ていただくと、その熱気を味わえると思います。うちのテニス部の場合、大きな試合だけでなく、レベルアップのためにプロアマ関係なく出場する試合に出ることもあります。もちろん授業との兼ね合いもありますし、出場料もかかるので、全部に出場するのは難しいのですが、不思議と試合の数を重ねている学生は、授業の成績も良かったりするんですよ。プロスポーツのようにテニスだけやっている人とは違い、文武両道を貫いている彼らの勇姿をぜひ生で味わって、応援してもらえると嬉しいです。」

## 法政のやり方で日本一を目指したい。 地道な練習とトレーニングで長所を伸ばす。

1部に昇格してから「簡単には負けないチーム」になったという植村監督。本当の強さを身につけ、王者になるためには、チームワークと4年生が見本となれるかがポイントだという。学生たちと定期的な話し合いをしながら信頼関係を築いていくとのことだが、どのような指導を行なっているのだろうか？法政大学ならではの指導方法を伺った。



「私は、学生たちが『今日もっと強くなろう！』と練習に没頭できる部活動の体制を作り、その中から強い選手を育成したいと考えています。高校のトップ選

手が数多く入学し、指導者も常駐する強豪校とは違い、法政には準トップ選手や中堅選手が入学して来ます。また、私が週2・3回、トレーナーが週2回、コーチが週1回と指導者が常駐はせず、半分は学生主体の運営体制です。法政では、豊富な練習量とフィジカルトレーニングで、1～2年かけて選手を鍛え上げて、3年生、4年生になった時に高校時代トップであった選手に勝てる選手を育成する、という強化方法を実践してきました。『法政に入ったら高校時代より強くなれる』と高校生から評価されるチーム作りを目指しています。部活動、チームワークについてはこの4年間で相当に改善してきたと感じています。選手強化のためには、練習に支障を来す部活動の規則、悪しき習慣は改めなければなりません。監督と学生、学生同士のミーティングを何度も実施して改善に務めてきました。お互い言いたい事、言いにくい事、言われたくない事を本気で話し合い、時には感情がぶつかり合って対立もありましたが、強くなるための部活動へと改革してきました。また、4年生の練習態度、礼儀、マナー、テニス以外でのしっかりした行動を下級生が見習う事で、チーム全体が良くなっていく事を感じています。選手の個性を伸ばす風通しの良い部活の体制を作り、猛練習を積んで大学日本一を目指すことが私の使命です。」